

第4問 (20点)

三重工業株式会社は、標準原価計算制度を採用している。下記[資料]にもとづいて下記の各問に答えなさい。  
なお、仕掛品勘定の記帳はパーシャル・プランによって行っている。

[資料]

1. 製品1個あたり標準原価

	標準消費量	標準単価	金額
直接材料費	3 kg	1,000円/kg	3,000円
直接労務費	2時間	1,200円/時間	2,400円
製造間接費	?	?	?

2. 製造間接費は直接作業時間を基準に標準配賦している。年間基準操業度は21,600時間、変動費率は1時間当たり900円、年間製造間接費予算額は32,400,000円である。

3. 当月生産データ

月初仕掛品	150 個 (80%)
当月投入	950
合計	1,100 個
月末仕掛品	100 (70%)
完成品	1,000 個

(注) 材料はすべて工程の始点で投入している。上記( )内の数値は加工進捗度を示している。

4. 当月の原価要素実際消費額は、直接材料費2,854,280円(実際消費量は2,860kg)、直接労務費2,280,498円(実際作業時間は1,902時間)、製造間接費は2,851,222円である。

5. 各月に生じた原価差異は年度末まで繰り越しており、年度末において売上原価に賦課している。なお、能率差異は変動費部分で把握する。

問1 次の(1)と(2)の仕訳を示しなさい。

- (1) 当月直接材料消費の仕訳(直接材料は材料勘定に計上されている)
- (2) 当月完成品計上の仕訳

問2 答案用紙に示した、原価差異勘定の記入を示しなさい。

問3 製造間接費から生じた原価差異を、予算差異、能率差異、操業度差異に分析しなさい。

第5問 (20点)

当工場では、第1工程と第2工程を経て製品Xを連続生産し、製品原価の計算は累加法による工程別総合原価計算を採用している。当月は、第1工程の終点と第2工程の途中点で正常仕損が発生したため、度外視法により適切に処理する。なお、払出原価の計算は先入先出法によっている。次の[資料]にもとづいて、答案用紙の各金額を計算しなさい。

[資料]

1. 製品Xの生産データは次のとおりである。第1工程の原料はすべて始点で投入され、第1工程完成品はすべて第2工程に振り替えられる。なお、( )内の数値は加工進捗度を示している。

第1工程		第2工程	
月初仕掛品	900 個(60%)	月初仕掛品	600 個(70%)
当月投入	3,000	当月投入	2,900
合計	3,900 個	合計	3,500 個
正常仕損品	200	正常仕損品	200
月末仕掛品	800 (50%)	月末仕掛品	300 (80%)
完成品	2,900 個	完成品	3,000 個

2. 月初仕掛品原価と当月投入原価は次のとおりである。なお、第2工程の原料費は、第2工程で平均的に投入されている追加原料の原価である。

	月初仕掛品原価		当月投入原価	
	第1工程	第2工程	第1工程	第2工程
前工程費	—	1,080,000円	—	[各自算定]
原料費	434,000円	61,000円	1,500,000円	423,000円
加工費	632,000円	611,000円	3,552,000円	4,230,000円
合計	1,066,000円	1,752,000円	5,052,000円	[各自算定]